

# どんびま

2012年10月9日発行  
発行者 椛の湖農業小学校

## ツリガネニンジン

山里の秋、草むらのところどころに首を伸ばして薄紫の花を咲かせるツリガネニンジンは北海道から九州まで各地に分布し、草原や堰堤、田畑の畦畔等に生育する多年草である。

地下に大きな根を持っていて、これに養分を貯蔵している。夏から秋にかけて、人に刈り取られると直に地上部を再生する、草刈り草原に適した能力を持っている。

根生葉は丸くて長い柄があるが、後から伸びる茎には柄の無い楕円の葉が3-4枚輪生となる珍しい種である。

秋になると薄紫の釣鐘型の可憐な花をいくつも咲かせる。ちょっと曖昧な記憶だが、子どもの頃はホタルノチョウチンと呼んで遊んでいたような気がする。

版画家の岩田健三郎さんは、この花のスケッチにこんな言葉を添えている。

「ツリガネニンジンの花の音を聞いたことがあるか？」

聞こうとする人にだけ聞こえてくる音がある。」

(草)



## 10月授業日のご案内

- 日程 10月21日(日)
- 受付 9:00~ 9:30
- はじめの会 9:30~ 9:45
- 授業 9:45
- (収穫・畑仕事) ~12:00
- 昼食 12:00~13:00
- 授業 13:00
- (稲の脱穀・焼き芋) ~15:00
- 終りの会 15:00~15:30

●締め切り 10月16日(厳守)

●問い合わせ・緊急連絡

- 持ち物 手袋、タオル、雨具、着替え  
買物袋(たくさん)、箸、食器

●郷土料理 栗赤飯、豚汁ほか

☆文集の原稿を持参してください。

農小での楽しかったこと、心に残ったこと、ご意見、思い出の絵、何でも結構です。同封の原稿用紙に、濃く書いて下さい。

(書き方は、6ページ)

10月の授業日に欠席の場合は、10月25日までに事務局山内まで郵送して下さい。

TEL0573-75-4417・09051109362

FAX0573-75-4418 (山内總太郎)

## ～ 農小レポート～

# 栗もお米も豊作だったヨ

天候不順が幸いした？のでしょうか、端境期が遅れたため、例年に比べて沢山の栗を拾う事が出来ました。台風の影響もなくお米の出来も良かったようです。

### 1 午前の授業。 栗拾い。

地元の栗農家のご厚意による栗園入りですが、今年は思いのほか沢山拾えて満足のようにでした。

### 2 畑の作業。 大根とカブの種まき、白菜苗の植え付け。

先月ポットに蒔いた白菜の種から大きくなった苗を植えました。

### 3 昼食。

松茸ごはん、きのこのかき玉汁、かいわれとひじきのサラダ、さつま芋の天ぷら、竹輪の天ぷら、きゅうりのからし漬け、トマト、タマネギのサラダ、ニンジン昆布。

### 4 午後の授業。 稲刈り。

一人3把を手刈りにして持ち帰り、ハザ干しにしました。

これは10月の授業で脱穀体験を行います。

### 5 案山子の片付け。

約一カ月の間田んぼを見張り、鳥獣から守ってくれた事に感謝をしながら、引き上げて来て解体しました。ずらり並んだ34体は圧巻でした。

### 6 ジャンボ南瓜の収穫。

沢山の苗を植え付けましたが、大きな物は一個しか出来ませんでした。これの重量当て投票をしましたが正解は一人もなく、1キログラム違いが8名でした。農場長からオモチャかぼちゃが賞品として渡されました。

正解は36キログラムでした。

カボチャを使ったイベント、ハロウィンを体験してみたいと思っています。

### 7 カブト虫運動会の表彰。

7月に間に合わなかった選手が8月に行った運動会の表彰がありました。

優勝 4G遠藤隆司、 2位 2G関愛子、 3位 4G田中拓光、5G金沢愛怜奈

### 8 バケツ稲コンクール。

45点（内5点は株穂）が出品され、先生方の審査により優秀な作品が選ばれましたが、作品にはかなりの格差がありました。やはり水管理が難しいようですので、先生方にアドバイスを受けて来年頑張りましょう。卒業式には表彰されます。

## ～とくちゃんのちょっと一言～

ハロウィンとはヨーロッパ地方で行われた「収穫感謝祭」行事の一つとされている。最近では日本でも時々見かけるようになってきました。我が校でも今年はジャンボカボチャが出来ましたので、見よう見まねで「お化けカボチャ」に挑戦してみませんか？ 私は1粒の種から5個の収穫を試みましたが、前日には牙を当てただけでしたので、安心していましたが翌日は完全に食い荒らされてしまいました。イノシシさんの仕業でした。2個残りましたので提供いたします。

～あぼ兄の百姓ぼなし～

## フォークジャンボリーと椀の湖を想う

9月21日、NHK「東海旅日記」が放映された。「椀の湖と言えば、フォークソングの一大イベント、全日本フォークジャンボリーが40年前に開かれたところだ。」と切り出して、続いて広大なソバ畑や19年目の農業小学校の栗拾いや稲刈りのシーンが紹介された。

全日本フォークジャンボリー(F.J.)当時を思い出してみる。

昭和30～40年にかけて、高度経済成長政策により、安い賃金で文句も言わずによく働く農民が都会へ流れた。そんな時あぼ兄は、路線バスの運転手としてバス会社に勤めていた。田舎に残った若者たちで、レコードコンサートや映画会、田楽座の公演、高石ともやのコンサートなどを町々でやっていた。「東京だけが文化じゃない」「アンチ中央文化」などと言っている内に、野外コンサートの発想となり、恵那郡坂下町(当時)の椀の湖で1969年、全日本F.J.が生まれた。野外でしかも夜を徹しての音楽会は日本の元祖であった。

木を切り、荒野を削り、石を積み上げてステージや会場を作った。ポスター、チラシ、チケットはむろん、水道、便所まで作る。まさに手づくりコンサートだった。

休日だけでは間に合わないと、勤務が終わると集まって、時には夜中まで作業をした。

小さな町の出来事は、地元では決して評価されなかった。当時の社会情勢は、東大講堂事件や浅間山荘事件など追い込まれた学生運動の凶暴化、一方で破れた服装や長髪で性別も分からないヒッピーの流行で混沌として、フォークソングはベトナム反戦や社会風刺などメッセージソングが多かった。ギターを持って3人集まると職務質問されるほどだった。

2年目から、実行委員会のメンバーは悪評を背負いながら準備作業へ通った。中には、何故そんな所へ行くのかと職場で冷遇されたり、家族がそんな所へ嫁入り前の娘はやれないと止められたりで1人2人と参加が減っていった。

反面、マスコミを始め外部からの反応は回を追って高まり、2年目は参加者は倍増し、3年目には人口6000人のまちにその何倍もの若者が押し寄せることとなった。

準備期間中に、全国から「お手伝いを」とやって来た若者が延40人いた。あぼ兄は彼らを一晩は家に泊めて話を聞き、翌日から宿舎で食事だけで働いてもらった。真面目で頭のいい子ばかりで、高校2年生が多かった。彼らが日本の政治のあり方まで論じていたのに驚いた。もちろんコンサートを楽しみに来ているから当日は観客になる。しかし、コンサートが始まって実行委員は誰一人観ることはできない。割り切って実行委員に徹してくれた者も少なくなかった。ある青年は事情が分かっているだけに苦悩した揚句に言った。

「僕帰らせていただきます。」真夜中に涙で別れた。九州から家出をしてきた子を捜しに来た父親にあぼ兄は言った。「真面目な子だから、今無理に連れて帰らず、しばらくここに置いてやって下さい。」分かって帰ってくれた。いろいろな事があったその中に俳優の佐野四郎さんがいた事が30年ほど経って分かった。仕事で椀の湖を訪れた本人から聞いた。「当時高校生で、木曾地方の研究のためと言って家を出て椀の湖へ行って、変なおじさんに使われた。」変なおじさんはもちろんあぼ兄のことで大笑いだった。

今思えば、あの頃だから出来たことだった。水道は水道屋(?)スタッフがパイプを背負い上げ、山の湧き水を溜めて流した。落差はあっても水量がないからエアーをかんていも断水した。そのためか、国内でお目見えしたばかりのコカコーラが10万本売れたとか。

売場には王冠の山ができた。便所は仲間の大工たちが斜面を利用して穴を掘り、掘立柱をベニヤで囲んだポットトイレだった。数が少なく、朝など長蛇の列ができ、会場内をバキュームカーが走った。

交通面では、まだマイカーは少なく、ろくに駐車場も無かった。ほとんどが列車で駅からの臨時バスは人があふれた。椈の湖までの5キロの道を歩く若者たちの長い列が続いた。小さな町の商店の食料品は品切れになって、空腹のため畑の作物に手を出した輩もあった。畑の作物の陰で用を足す者も数多く、社会問題になってても不思議でないところだった。

3年目には地元民の通行を妨げない為に、交通安全協会の協力を頼んだ。制服が警官に似ていたので誤解され、「体制側だ」とか「民衆の祭りではない」などの批判もあって、メインステージは占拠されて討論会になり、コンサートは中断のまま最悪の幕切れとなった。

どう考えてみても、坂下という町はよく会場を貸してくれたものだ。ありがたく素晴らしい町だと思うと同時に、町民には散々迷惑をかけて申し訳ないと思いつけてきた。

最近になって、「坂下町史」「坂下小史」を読む機会があって、あぼ兄はホッとした。

椈の湖は農業用ため池である。戦後の食糧難を解決するために、農林省(当時)の計画を元に話が進められていたが、あまりに工事費が嵩むと云うので二転三転したが、4戸の家屋移転もでき、1950年着工された。当時は今のような重機は無くほとんど人力に頼った。工事の始まり頃(米1升130円の時代)日当は180円だった。他に現金収入のない農民はよく働いた。動員人数9万人、総工費1億3千万円、8年の歳月を費やして周囲2km、水面16haのため池ができた。付近に自生する椈にちなんで椈の湖と名付けられた。受益農地面積は坂下町で39ha、福岡町(あぼ兄の地元下野地区)が66haとなった。

その後、商工会などが中心となり観光地として宣伝しようといくつかの試みがなされた。1969年には町内の老壮会が湖岸に100本の桜の植樹を行った。同年、全日本F.J.が開催され広場ができ、その広場めざしてフォーク愛好の若者たちが押し寄せた。以来、椈の湖の名は全国的に広く知られるようになった。そして、F.J.実行委員会のメンバーを中心にフォークの活動は続けられ、毎年のようにコンサートが開かれてきた。

F.J.が「町史」の中で数ページにわたって記載され、評価されているのを読んで、あぼ兄は長い間のモヤモヤしていた事がいっぺんに晴れたように感じた。

10月18日～21日、「2012 演劇 CAMP in なかつ川」が市内、馬籠ふるさと学校、常盤座(福岡)、蛭子座(蛭川)で開かれる。その第1日目の分科会の一つが「フォークジャンボリーが残したもの」で、あぼ兄は山内總ちゃんとゲストとして話す予定だ。主催者である全国演出者協会の理事長の和田喜夫さんによると、全国的なこの催しがこの地で4年目をむかえるのは、中津川では地歌舞伎の劇場が守り続けられ、野外ではフォークジャンボリー開催の歴史があるので、その体験を学びたいからとのこと。F.J.をこの地で開く事が出来た理由を裏方の立場で語り、我々にはフォークの活動の延長である農業小学校を含めて、その後のメンバーの活動・交流を話すつもりだ。

今年の6月、読売新聞は全国版にA3サイズ3日間連載で「全日本F.J.」を取り上げた。あれから40年余が過ぎて、F.J.が改めて見直され、社会的に認められているが、あぼ兄にとっては、地元坂下で評価を受けた事がなにより嬉しい。さらに「町史」には椈の湖農業小学校が5ページにも記載されていて、あぼ兄はしみじみ思う。40年を振り返ってみれば、随分遠回りしたが、決してムダ(骨)ではなかったと。



## 文集原稿の書き方についてお願い

原稿用紙は2種類あります。

- ・低学年（3年生以下）は10ミリ原稿用紙に書いて下さい。
- ・高学年と親さんは7ミリ原稿用紙に書いて下さい。中央の左右横2列づつを空けて、太い線の枠内に2段に書いて下さい。
- ・どちらも太い線の枠内の最初に「題」と「氏名」を書いて下さい。

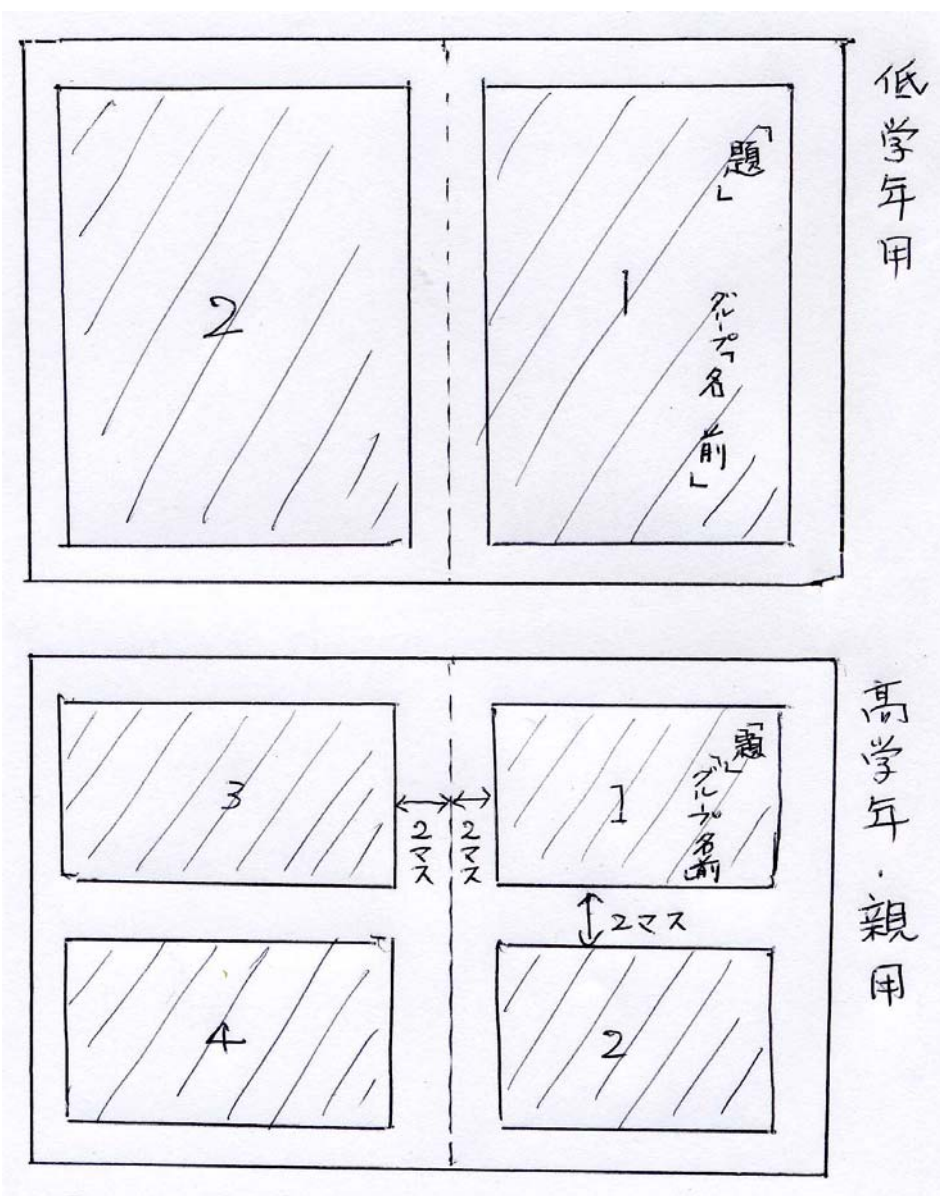
皆さんの原稿はそのままコピーをとって印刷にかけますので、できるだけ濃く書いて下さい。  
鉛筆なら2B・4Bがいいかも。

消しゴムで消して書き直す場合は前の字をきれいに消して下さい。

文章だけでなく、絵・スケッチももちろんO.K.です。

皆さんの一番心に残った事、楽しかった事、関心があった事など何でもお書き下さい。

農業小学校に対するご意見も是非お願いいたします。



第19期  
椀の湖農業小学校

卒業記念

# 作品展

平成24年11月26日(日曜日)

農小の卒業式の日です

椀の湖自然公園ギャラリー

農小の受付をする建物です

# 作品を出してください

「夏のもの作り教室の作品」を持ち寄ってください。

その他 農小で撮った「写真」思い出を描いた「絵」など

なんでもけっこうです。 作品は当日持参してください。